

De vive voix : 増田一夫先生を送る

その他のタイトル	De vive voix: A Farewell to Prof. Kazuo Masuda
著者	原 和之
雑誌名	Odysseus : 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要
巻	24
ページ	127-129
発行年	2020-03-16
URL	http://doi.org/10.15083/00079446

De vive voix：増田一夫先生を送る

原 和 之

確か元号が平成に変わってまだ間もない頃のことだ。地域の修士課程に入ったばかりで、ラカンの『セミネール』の記録を中心に研究をしようと考え始めていた私は、フォーコーのとある翻訳書のあとがきで、関連する未知の情報が触れているのに行き当たった。『セミネール』については翻訳もほとんどなく、フランス語がようやく読めるようになった程度の初学者にとってはどこに何があるかを把握するだけでも大変だった頃で、私は訳者に詳細を問い合わせることを思いつき、たぶん出版社経由で手紙を書いたのだと思う。しばらくして、予期していた手紙でのお返事の代わりに、その当時住んでいた駒場寮に訳者から直接お電話をいただいた。それが増田先生とお話しした、おそらく最初の機会になる。

私の記憶が正しければ「早いほうがよいと思ったので」とおっしゃったのを、研究者の慣行に疎い私はそういうものかと思っていたのだが、いま考えてみるとあれは割と珍しいことではなかったか。ラカンなんぞに興味を持つ後輩がどんな奴か、声でも聴いてやろう、というお気持ちがあったのかどうかはわからない。ただ寮事務室の電話口で、出典となる箇所を丁寧に教えていただきながら、立派な先生方ばかりで近づきがたく思っていた研究の世界も存外風通しのよいものなのだなと思ったことは、いまでもよく覚えている。

やがて増田先生が駒場にご着任になると、私は指導学生として面倒をみていただくことになった。とはいえ私はすでにフランス留学中で、先生がご着任後すぐに大学院重点化のため、当時の若手は駒場の組織をひっくり返すような改革に否応なしに巻き込まれ、大変な思いをなさっていたということは、後になってはじめて知った。ただその時はわからなかったのだが、そうした一大変動を示唆するヒントはあったのだ。というのも、いちど現地でのインタビューのために録音機材を借りたいということで留学先の寓居までご連絡いただいたことがあったのだが、その時に伺ったインタビュー先というのが移民関連の団体だったのである。その時は先生のそれまでの哲学思想系のお仕事との繋がりがわからず首をひねっていたものだったが、いまなら新しい「地域文化研究」の創出へとむけて、フランスの移民問題へのアプローチを、その頃すでに準備されていたのだということがよくわかる。

ともあれ私自身が駒場に着任してからは、今度はフランス科の同僚として、そのお仕事をりに間近から接することになった。まず記憶に残っているのは、8号館の耐震診断問題である。当時地域文化研究学科長でいらした増田先生は、すでに築40年近くになっていたこの建物の耐震診断が、大学の法人化などもあって遅れているのをたいへん心配され、学科内での問題の共有を図ると同時に個人的に建築家の意見を聞くなどもされて、腰の重い研究科長室を動かそうと苦心なさっていた。小規模な大学から赴任してきたばかりの若輩者には、そのとき増田先生がそれに一人で——と当時の私には見えていたのだが——立ち向かわれることがなぜ必要だったのか、その理由がきちんと理解できていたとは言いがたい。ただその後フランス科や専攻、部会のさまざまな仕事をご一緒する中で、駒場の巨大な組織の歯車を回すためにどれだけの労力が必要なのか、いったん回りだしたそれを止めることがどれほど難しいのか、そしてそこで無理をすることがどれほどの軋轢を生むのかわかってくると、問題を予見し、適切なタイミングで声を挙げ、そして丁寧に合意を形成することの重要性が、遅まきながら理解できるようになってきた。

耐震診断の遅れに対して抱いていらした危機感の正しさは、その後の出来事によって証明されたことは言うまでもない。また増田先生のイニシアティブは決して孤立したのではなく、大学院重点化の苦労を共に乗り越えてきた、同志たる先生方に受け止められ、支えられていたということもしばらくしてわかってきた。講演後の質疑や会議といった公の場所での水際立った デンテルヴァンション 発言がまず想い起こされる増田先生だが、同時にインフォーマルな場面では細やかにコミュニケーションをお取りになるという側面もある。そもそも話し好きでいらっしゃるということもあるだろうが、それ以上に先生が基本的な態度として、大学のコミュニティらしく開かれた言論を通じて物事が進んでゆくということをなにより大事にされてきたことが、対象地域も専門も異なった研究者の集まるこの専攻でも広く信頼を得て、専攻長をはじめ指導的な役割を果たして来られた、その根底の部分にはあったのだと思う。

後期課程改革に学部教育の総合的改革、TLP フランス語の立ち上げにアリーナ問題、さらに最近ではフランス語新教科書に向けた試みと、駒場で新しい動きがあるたびに、そこには増田先生の、生き生きとした肉声での語りがあった。また去年は先生にお誘いいただいて大学院の共同セミナーを実施することになり、大学院生時代には見ることのできななかった授業中の御姿に接することができたが、このセミナーは私にとって自分の研究と現代の諸事象の接点を考え直すきっかけにもなった。然るべき時に発せられる然るべき言葉の恩恵は、こうして研究方面にも及んでいるわけだが、本来のご専門のデリダから政治哲学へ、そしてフランス現代社会論へと、早くから果敢に研究領域を広げてこられた増田先生に比べればお恥ずかしいほど遅々たる歩みではあるけれども、私も自分の研究から可能な「地域文化研究」への貢献がどのようなものでありうるのか、こ

のセミナー以外にも様々な機会にいただいた手がかりをもとに、今後も考え続けてゆきたいと思っている。

最後に増田先生の長年にわたるご尽力とご助力にあらためて御礼を申し上げ、またご退職後も元氣でご活躍されることを心より祈念して、送る言葉とさせていただきます。